



統

一

法財人團

統

一

團發行

目 次

法悦と願行(其一).....	本多日生
優婆塞戒經要解(其八).....	本多日生
開目鈔講話(第四十七講).....	小林一郎
本佛實在の宗教哲學(二十一).....	河合陟明
記事	
○本部圖報	
○福島教信	
○入帳報告	

第四十八年三月號

第三卷第百七十六號
 昭和十八年三月二十五日發行
 昭和十八年三月一日發行

統

一

第三卷第百七十五號
 昭和十八年二月二十七日發行
 昭和十八年二月一日發行

第五百七十五號

第四十八年二月號

財團 法人統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經
過ス其間内ニ佛祖正派ノ法統ヲ闡明シ
外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク
萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對
應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向
上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ
決シテ他ノ追随ヲ許サザル所ナリ
統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母
體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出
セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天啓會
アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ
又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ
炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ
與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ
大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精
要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超
エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行
シ來レリ
統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル活動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者
本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進
ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ
將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セン
ト欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ
第一佛祖正派ノ法統ヲ擁護スル事 第
二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮
スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起
スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シ
テ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日
蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲
ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一
ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ
教旨ノ正明 研學ノ淵達 活動ノ旺盛
此等ハ統一團ノ標語ナリ
寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文
化ヲ闡明シ此ニ邁スル教學ノ特色ヲ永
久ニ持續セントスル本團事業ノ眞實ハ
最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ
同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法
爲國爲一切衆生切に懇望スル所ナリ

本團畧則

- 目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シ
テ佛祖正派ノ法統ヲ擁護シ我國精神文
化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ
培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ
理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ
教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」
ヲ發行ス
- 維持員 本團ノ事業ヲ贊成シ一時金參
百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セ
ラル、方ヲ維持員トス
- 贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五
圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- 正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金
貳圓五拾錢ヲ納出セラルル方ヲ正團員
トス
- 入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ
適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ
無料ニテ頒布ス
- 諸友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ諸友トス

法悦と願行 (其二)

本多日生

本日は信仰の心得について、「法悦と願行」といふことを、お話し上げようと思ふのであります。法華經に導かれたる信仰は、頗るよく調ふて居る意味をもつので、ただ有難いといふことだけではないのであります。その有難い感謝の精神の中から非常な強い力を産み出すところに、法華經の信仰の特色があるのであります。

法華經の法師品第十のところに、「是人は大信力及び志願力、諸の善根力有らん」と説かれて居るのであります。『是の人』といふのは、即ち法華經を修行する人を指すので、その法華經を信じ、法華經を實行するところの、所謂法華行者と稱する者はどういふ意味合の人かといへば、一つには大信力を有つて居り、二つには志願力を有つて居り、三つには諸の善根力を有つて居るといふことを言はれて居るのであります。そのうちの信力といふことも種々の意味を含むのであります。主なる點は歡喜法悦の心で、即ち佛様に導かれ、佛様に護られて、自分がそこに非常な救ひを受けて居る。今まではただ自分だけのものと思ふたけれども、法華經を信すれば大慈大悲の本佛が現はれ、さうして導いてやらう、助けてやらうといふ御心が、夜も晝も自分の上に及んで居るので、恰も親切な母を有して居る如くに、自分のためには如何なることでも護つてやらうと、御心配をして下されて居る佛様のあることを信じて、そしてその信念の結果が、自分が非常に頼りのある者になるのである。今までは自分獨りで苦しみと闘ひ、罪と闘つたのであるけれども、この大慈大悲の本佛を得れば、自分の苦しみは佛によつて救はれ、自分の罪も佛によつて打消されるのであるからして、そこに非常に強い力といふものの助けを得て、またそこに非常な法悦といふ精神的な喜びが生れ

て来るのであります、それが信仰といふことの主なる點であります。之を擴げれば信仰といふ言葉はいろいろな意味を含むけれども、その中心になるものは信念であつて、まことに有難いことなんで、自分のやうなものでも、絶對無上の本佛が、一人子の如くに自分を憐れみ、自分を導いて下される、こちらは忘れて居つても向ふの佛様は、夜も寝もお忘れなされない、それはただ今日ばかりでなくして永遠に、自分が佛になり上るまでは、佛様は吾れを捨てずして導き助けて下されるのである、といふことを心に深く認めて居ると、そこに信念といふものが打立てられるのでありますからして、その結果は、自分が非常な助けを得たといふ、その歡び悦びの心が自然精神に満ち充ちて来るのであり、それが信仰といふことなのであります。何か貰ひ度いといふやうなものはもうなくて、すでに護られて居る、導かれて居るといふ、その満たされたところの精神を信仰といふのであります。信仰は悦びの心であり、満たされた心であります。こんな嬉しいことはない、こんな有難いことはないといふ、心の底から御禮を申上げるやうな精神に生きて居るところが、それが信仰といふことであります。何か今なほ淋しい感じを有つて、そして悶へて居る間は信仰といふことを得て居らないのであります。もともと獨りぼつちに捨てられて居る人間であるから、そのもとに退るに従つて或は苦しみ、或は極み、或は悲しむ。さういふ精神の動搖を起して來ると、嫉みといふもの、怒りといふものが生じて、そこに罪が湧いて來るのである。けれども、佛様と俱に在り、佛様に護られて居るといふことを徹底的に考へたならば、何時でも賑やかな心になつて、獨り野原に立つて居ても決して淋しいといふものでない。一番尊い偉大な力のある方と、俱に往き、俱に戻り、俱に在るのちやといふ、この感じを即ち信念といふのであります。しかしさういふ考へはなかなかいふものは起りにくひのでありますからして、それがためにお經を誦んだり、説教を聽いたりするのは、お經の中に何が書いてあるかといふと、いま申す意味が委しく記されて居ります。汝等の肉眼を以つて見ることは出來ないでも、我れは汝等の傍を離れるものでないと仰有つて居る。「近しと雖も而も見えずらしむ」。肉の眼を以つてしては見へないけれども、信仰の眼を開きさへすれば、我れは汝の傍を離れず何時でも居

るのだ、といふことを徹底的に説かれたのが、毒量品の偈頌と稱して、あなた方が讀んで居られるお經文なのであります。従つて信仰の成立つた人といふものは、如何なる場合にもその佛様のことを思ひ起すやうになつて來るので、丁度子供が自分で困るやうになると、母を呼ぶ、「おつ母さん」と呼ぶ如くに、信仰にある者が自分の心、自分の力に耐えられないものに出會ふと、佛様を呼ぶ。ここに南無妙法蓮華經といふ聲が生れて來るのであります。

だからして信仰そのものの實質は法悦であります。その法悦といふものは精神的の悦びであつて、物質的な、外から與へられた衣食住の悦びではなくして、精神的に非常な尊いものを與へられたところの悦びであります。精神的な食物、精神的な着物、精神的な住宅を得たことを悦ぶのであります。たとひ家が燒拂はれても、「それは形ある材木を以つて造つた家だから燒けたのであつて、自分の精神を托して居るところの、法の家といふものは燒けるものでない」といふこと、そこに偉大なる悦びをもつのであります。たとひ自分の身體が木端微塵に碎かれても、「これは肉體が殺されるのであつて、自分の生命を爲して居るところの精神は少しも壞されるものでない」といふ風に、自己の本質を肉體にとらずして、生命即ち精神に取りますから、何ものも畏れるところは無いのであります。その生命に着せるものは何であるか、その生命の食物は何であるか、その生命の住んで居る家は何であるか、といふことを考へたときに、實際形を離れたるところの偉大なる喜びといふものが生じて來る、それが法悦といふことなのであります。普通の人間は、餘りに自己といふものを肉體の方に囚はれ過ぎて居りますが、これは要するに借家である、借物である、だから何時かは返さなければならぬ、何時かは壞れるものに相違ないものである。その借家を借りて入つて居るところの主人公、この自分の本質といふものは、即ち心といふもの、魂といつたところのものである、それが本當の自分であります。その本當の自分を導き助けて呉れるものは何であるかといへば、それは法なのであります、金でもなければ飯でもない、また形の上の家でもないのであります。自分の實際を滿し、自分を永遠に幸福ならしむるものは、ひとりこの信仰あるのみであります。信仰して善根功德を通してのみ、この自分に力をつけ、この自分に着物

をきせて呉れるのです。だからして、世の中の子供の者は、大抵肉體の方の關係から何の彼のといふけれども、宗教の教へるところは、本當の自己を教へんとして起つて居るもので、それを得たとき、その信念の發露、そこに悦びといふものが非常に強く現はれて来るものであります。「ああ立派な家に住んで居るな」と羨ましい程の家をもつてゐましても、それは「肉體を入れる家は有つて居るけれども、精神を入れる家は有つてゐない」。また「あの人は衣裳持ちだ」といはれる程、肉體に着せる着物は持つて居つても、「精神に着せる着物は襟袷一枚も持つてゐない」といふことを深く考へるとき、自分がよしや汚い浴衣一枚しかなくとも、「精神に着せるものは十二單衣の立派なものが出来上つて居るぞ」といふその精神、それを法悦と斯ういふのであります。それだからといつて、何も浴衣ばかり着て居れといふではありません。まづ精神にそれを得て、そして後で肉體をも同じく此方がよろしい。人には各々事情がありますから、人各々分に應じたる生活を營んで行くより仕方はないけれども、その生活の物質だけが自分の全體の幸福であつてはならない。その上にも一つ偉大なる精神的な生活、精神的悦びといふものを持つて来るところに、初めて信仰の生活といふものがあるのであります。それは實に何でもないことだが、一般の人は分らないで居る。どこまでも自分といふものを身體ばかりに考へて、魂の方を忘れて居る。これが普通の人間であつて、「覺めざるの生活」と宗教の方では之を申して居るのであります。

たとひ眼をあけて居るといつても、肉の眼をあけて居るばかりで、精神の眼をあけないのであれば、一寸先は眞闇がり、恰も暗夜に燈を消したるが如く、眞闇がりでも何にも見えない。本當の眼は閉ぢてゐても、精神の光を以つて永遠の時、永遠の先を照すに於ては、世界の果までも自分の精神の光で見透せるやうになります。この生活に入れば、そこでこんな嬉しいことはないといふ力が強く起つて来るのです。それを一旦握つたらもう放さぬやうにしなければならぬ。さういふ気分には一寸容易になれぬものである、なれぬからして、そこだつたといふことを握つたら、決して放さぬやうにしなければなりません。(次續)

優婆塞戒經要解 (其八)

本 多 日 生

受戒品 第十四

若し佛に歸し已つては寧ろ身命を捨つるとも終に自在天等に依らず、若し法に歸し已つては寧ろ身命を捨つるとも終に外道の邪妄に依らず。汝能く是の如く至心に三寶に歸依するや否や、若し能はずと言はば復應に語つて言ふべし、善男子よ、優婆塞戒は極めて甚難たり、若し人三寶に歸依すれば、是の人は則ちこれ諸の衆生に無怖畏を施し已はれるなり、若し人能く無怖畏を施さば是の人は則ち優婆塞戒を得ん。

善男子よ、優婆塞戒を受ければ先づ世事を學び、既に學んで通達すれば如法に財を求めよ、若し財物を得ば應に四分となすべし。一分は應に父母、己身、妻子、眷屬に供養すべし、二分は應に如法に販轉すべし、留餘の一分は藏積して用に擬す。是の如きの事、汝能く作すや否や。若し能くすと云はば復應に語つて言ふべし、善男子よ、財物は四處に寄附すべからず、一には老人、二

には遠處、三には惡人、四には大力なり、是の如き四處には寄附すべからず。

若し三歸を受けて一戒を受持するを是を一分と名け、三歸を受け已つて二戒を受持するを是を少分と名け、若し三歸を受け二戒を持ち已つて若し一戒を破るは是を無分と名け、若し三歸を受け三四戒を受持するは是を多分と名け、若し三歸を受け五戒を受持するは是を滿分と名づく。汝今一分の優婆塞とならんと欲するや、滿分となるや、若し意に隨つて説けば、爾の時に智者當に意に隨つて授くべし。

佛に歸依了つたならばその信仰を維持することが大事である。たとへ命を失ふやうな事があつても、外道などを顧みもしない。又佛法に歸依した以上には、外道の教に行かない必らず佛法に従ふ。僧に於ても然りでこの三寶歸依の精神を一貫して、且つその誓を言明して信仰の告白をやる。優婆塞戒を持つて之を貫くといふことは難かしいことであるけれども、併し三寶に歸依したならば、その徳は宏大なものである、その信念から現はれて、多數の人に本當の信仰と慰安と平和を與へる力がある。之も己の信仰心が第一に利他の精神に進んで居ることを示して居るからであります。人にさういふ精神的の慰安を與へることが出来れば、優婆塞戒はその人の手に入つたのである。人々に精神の平和と満足とを與へ、所謂精神的教化を普及することに依つて、優婆塞戒が得られるのであります。

殊に又優婆塞戒を得た者は、珠數を手につま繰つて居るばかりが佛教徒ではありません、世間の事を能く學んで、且つそれに達したならば直ちに活動を起して、その正しき方法に依つてお金儲けて、お金を得たならば更に運轉を計つて、その得た利益を四つに分けて、一分を以て生活費に充て、四分の二を元の資本に加へて更に大いに擴張することと残りの一分は積んで置いて不時の災厄の費に充てるといふやうな分度制を立てて行く。而してその得た所の金銭は

大切にしなければなりません、不確實な所に貯蓄してはいけません。この「寄附」とあるのは、お寺へ物を寄附するといふのでなく、今の言葉でいへば銀行に寄託するのであります。決して次のやうな四箇處に寄託してはならぬ、即ち老人に預けては何時死ぬか分らぬ、又遠方に預けてはいけません、更に惡い者に預ければ取られてしまふ、或は亂暴人に預ければ返して呉れといへば、拳骨でやられるかも知れないからいけない、之を今日でいへば不確實な銀行に預けてはいけないといふやうに、得たる所の財産を保護する方法に就て教へられて居るのであります。

この戒律をやつて行くには、全體を得なければならぬことではない、少しでもやつて行かなければならぬ。かかる意味があるに拘らず念佛門徒は、自力は邪魔になるといつたのは淺ましいことである。千里の道も一歩より始まるるか、或は千飯の山も一餐より始まるといふが如くに、兎に角一と握りの土でも積んで行けば山になる、「一と掴み位の土は實様でも持つて來ることは出來やう」「出來ます」「それなら持つて來い」といふやうな風にして段々に善導する。一戒を持つてば一分である、二つになれば少分の菩薩である。併し一旦持つたのを破ればそれは無分といふことになつて文なしになる譯であるから、それではいけないけれども、茲が實に面白い、「無分」といふのはまるきり無いのとは違ふ、一旦有つたのを無くしたのである、無くしても又やれば宜いのである。それから三つ四つやれば多分といふことになる、五戒を全部持てば滿分であります。五戒といふも實に難かしいことではない、殺生しない、盜みをしてない、邪淫をしない、嘘をいはない、酒を飲まない、斯ういふ事を一度に皆やらなければならぬといふことになれば難かしいか知らぬが「汝今一分の優婆塞とならんと欲するや滿分となるや」是はその人の希望に依つて滿分がやれなければ一分でも宜い、若し意に隨つて説けば意に隨つて授くべしといふので「酒が飲められなければ嘘をつくのを廢めたらどうだ、嘘をつくことが廢められなければ泥持の方はどうだ」「それは出來ます」「それではそこからやつて行く」といふ調子で善に導いて行く精神が實に尊いのであります。一つやれば一分だとか、まるきりやれば滿分だといふやうな事ではなく、この全體に含まれて居る所の、その人を徳化する所の精神を能く見なければなりません。

開目鈔講話

(第四十七講)

小林一郎

この前は涅槃經の本文を引用されましたその半分だけを讀んで居りました。即ち佛の正しい教を護る爲に世間の人が命に懸けて戦ふ、或は刀を用ひ、或は槍を用ひ、弓箭を執つて戦ふ、無論戦ふには自分の命を捨てるといふ覺悟で戦ふ。さういふ場合になつて居りながら、出家の人が却て努力を吝しんで、それで正しい教の世の中に弘まることに力を盡さぬといふことであつては、これはどうも濟まないことである。さういふやうな努力を吝しむやうな心持で居つて、淨らかな行ひをして山の中に引込んで居るといふやうなことでは、これも本當に教を弘める職分を果す者とは言へない「能く爲す所なからむ」これは役に立たぬものである。斯ういふことをお釋迦様は仰しやつてあるのであります。

これは謂ふまでもないことではありますが、人間が世に立つて何も過ちを犯さぬといふことだけであつたら、生れて來た甲斐はない譯であります。勿論吾々は人に厄つた考を有つて居る者を覺醒させる、目を覺まさせるといふだけの覺悟を有たなければならぬ譯であります。その事を今涅槃經の中に言つてあるのであります。佛敎は永い間日本に行はれたものであります。又それだけに弊害が多くなつて來まして、信心すると唯自分が後の世に極樂に行くのを求めるとか、或は災難を避けるのを求めるといふやうになつて來たものでありますから、信仰の力に依つて自分が世の中を善くするやうな覺悟をきめるといふやうな方面が殆ど顧みられなくなつて來た。江戸時代ズツとさうでせう。だから信心といふことと實際の世の中といふことが離れ離れになつてしまつた。さういふ時代に西洋の人がやつて來て日本の國の様子など少し知つて來たから、西洋の人は今でも佛敎といふものは非常に消極的なもので、ただ人間に誇めを教へるものだといふ風に解釋して、そんな批評などして居るのであります。マア法華經を讀んだり涅槃經を讀んだりして見ますと、決してさういふものでない、己れを捨てるといふ心持があれば、ただ捨てたばかりでなく、その自分の利害損得を離れて、世の爲にも人の爲にも盡すといふ心持がそこから生れて來る筈だから、信仰といふものは非常に積極的なものである。信仰の中からどんな仕事でも生れなければならぬ。斯ういふことが始終教

介を掛けるが、又幾らか世の中の役に立つ、自分の厄介を掛けた方がマイナスで、役に立つた方がプラスで、これを差引すれば零になるならば、生れて來ても來なくても同じであります。つまり言へば場所を塞いだだけ損でありませう。だから人間として生きてたら何程かプラスの方が残らなければならぬ筈であります。マイナスでは無論いけないけれども、差引いて零になるくらゐなら生れて來ない方が餘程宜い譯であります。それでありますから悪い事をしないといふだけでは少しもそれは誇りに死んでしまへば宜いといふことになる。人間として生きて居る以上は、何かやはり自分の努力に於て世の中の役に立つといふことでなければならぬ。況して出家の人が佛に仕へて、法を學び又法を弘めるといふ以上は、ただ自分が淨らかな行ひをして居るといふだけでは事足りるものではない。進んで教を弘め、又進んで世の中の間違

へられて居るのであります。それだけに周囲の人を善くするといふ奮發心がないといふことはまだまだ信仰が足りないからだ、信仰の力が弱いからそんない加減な所で止まつて居るのであつて、本當の信仰を有つたならば、人の不正を見てこれを教はずには居られない。人の間違ひを見て直してやらすには居られないといふことになるのはこれは當然であります。この事は涅槃經の中に大變に力強く言つてあるのであります。さういふやうな信心を勤めることが出來なければ、それは僧侶たる者が僧侶の役目を勤め了せないのだ「爲す所なからぬ」役に立たぬものである。斯う言はれるのであります。

乃至時に破戒の者あつて是語を聞き已て威共おそろしに瞋恚して是法師を害せん。是説法の者、設たとひ復命終すとも、なほ持戒自利利佗と名く等おと云云。章安の云、取捨宜きを得て一向にすべべからず等、天台云、時に適ふ而已等云云。譬たとへば秋の終りに種子を下し、田畠を耕さんに

稲米を得ること難し。

これは前にも一度引かれたことがありますが、お釋迦様が昔の前の世の事を話される。前の世に有徳王といふ王があつた、この王は大層心も正しく又教を重んずるといふやうなお心持もあつた立派な王であつたやうでありませぬが、この有徳の王であつた時に覺徳比丘といふ人があつて、この人は洵に信仰も正しく又世の中の人の間違つたのを直してやらうといふやうな大變積極的な心持を有つて居た者であります。この覺徳比丘が教を説いてただ自分の信する所を説くだけでなく、世の中の人の間違ひを一々指摘して、斯ういふ間違ひをしてはいかぬ。こんな事をやつて居つては逆も世の中は善くならぬといふことを遠慮なく説いた。勿論それは自分が世間の人に気に入られてお布施を餘計貰ひたいとか、自分の地位を保ちたいとかといふ心持があつたのでは彈りなく言へませぬけれども、この人は立派な人であつてそんな考は無いものでありますから、自分の思ふ所を熱心に説いた。さういふ人があると、信者の御機嫌を取つて自分の一身の安泰を圖つて居る坊さんが困つて来る。片方は別にさういふ者を攻撃する爲に言ふのでなくても、自然それに當るでせう。教を説きながら金を食つてはいけません。地位を食つてはいけなと言ふから、金を食つたり、地位を食

いものであります。彼奴をやつつけろのだといふと味方が出来る。それで間違つた坊さん達がそんな世間の若い人を煽つてまして、さうして覺徳比丘の教を説いて居る所を襲つて、武力を以てこれを脅迫しようとしたのであります。

ところが坊さんといふものは前に申したやうに、自分の寺に武器を貯へて居る譯ではない。又本當に言へば出家の人が人に對して戦ふといふことをしてはならない。戦ふのは在家、俗人の人で、出家の人が戦ふといふことは出来ない譯であります。今の覺徳比丘といふ人は佛の戒を守つて居るのであるから、さういふ暴力の者がやつて来ても自分は手向ひをしない。ただマアさういふ亂暴なことをしてはいけないといふので、少しも驚かないで教を説いて居る。相手は暴力の奴だからその儘にして置けば覺徳比丘は殺されてしまふかも知れない。寺を焼かれてしまふかも知れないといふ場合になつた。この事を王様の有徳王といふ人が聞いて、自分の臣下を併れて大急ぎで其處へ駆けつけた。これはマア王様でありますし、又お伴をして来た人も武士でありますから、坊さんとは違つて、ナニモ武器を執つて悪いといふことはないのですから、武器を執つてその暴力を以て覺徳比丘を脅かす者共を相手にして戦つて、到頭これを追散らしたの

つたりして居る者は、やはり自分の事を言はれるやうに思ふ譯であります。片方は別に誰に怨みがあるといふ譯ではなくして、自分の信する所を平氣で言ふのだけれども、言はれる方は困る。そこで片方の「破戒」といふ佛の教を護らない連中が、どうも彼奴が一人居るので始末が悪い、あれをあの儘にして置くとだんだんに自分達の信者が離れてしまつて自分達も困つて来る、今の内に何とか一つあれを勢力を失ふやうにしてしまはなければならぬといふことを計畫して、さうして世間の思慮分別もない若い人を見ますと、あの坊主は怪しからぬ奴で、ああいふ事を言つて居る、あれの言ふことは間違つて居るのだから、佛の教が世の中に行はれなくなつてしまふ。あれを何でも一つ教を説くことの出来ないやうにしてやらなければならぬ。それにはただではいけないから、皆で武力を以てあれを脅かして、さうして彼處を追拂つてしまはうぢやないかといふやうなことを言つて若い人に勧めめる。若い人といふものは考のある人もあるが又ない人がある、大概若い人は血の氣が多いから、彼奴をやつつけろと言ふと面白いからやる、吾々も年の若い時分に交番の焼打だといふ時には、まさか自分で火を放けはしないけれども、彌次馬になつて後ろの方から手を叩いて居つた覚えがありますが、何かそんな事を若い時にはやりた

であります。ところがその王様は急いで行つたので、人数が少なかつた。亂暴する奴の方が人数が多かつたものでありますから、それを追拂ふことは出来なけれども、王様はその爲に傷を負うて到頭其處で死んだ。その死ぬ時に覺徳比丘といふ坊さんがその王様にお禮を言つて、あなたは實に有難い方だ。王様の貴い身分を以て私のやうな者を保護する爲に斯うして駆けつけて下さつて、今傷を負うて死なれるのだが、私はつまらぬ者であるけれども、私の説く教は佛の教で非常に尊い教だから、あなたが今日此處で私の爲に戦つて下さつたといふことは私の爲ではない。佛様の爲だ、佛様の爲に戦つて命を捨てるといふことは實にこれは廣大な慈悲であるので、後の世に至つて必ずその報いを受けられるだらうといふことを申されましたので、有徳王も喜んで、さうか、いつまで生きたつて人間は百歳までも生きられるものではないのに、教を護る爲に命を捨てて大きな功德を積んだといふことであれば、自分は満足であると言つて喜んで死んだ。斯ういふことが涅槃經の中にあるのであります。その事柄の一部分だけをここに引用されて居る。これは日蓮上人より自分のお弟子にお興へになる御書だから、お弟子達は涅槃經を読んで知つて居るのだから、略して斯ういふ風に書いて居られるのであります。これは涅槃經

を讀んで居る人には解るが、涅槃經を讀まない人にはな
んだか變だナ、前後の辻褄が合はないといふやうに見える
るのでありますが、マア大體斯ういふことであります。
それでこの教を護る爲には俗人であれば時に依ると命を
捨てて戦はなければならぬこともある。出家の人は自分
は武器を執ることは出来ないのだから、能て命に掛けて
教を弘める。斯ういふことでこの在家、出家兩方の人が
さういふ心持であれば、教は必ず世の中に弘まつて行く
に違ひない。この事をお釋迦様が御入滅に先つて大勢の
人に教へられたのであります。

この事を日蓮上人がここに引用されて今の時代が正し
くその時だから、出家の者は如何なる迫害にも耐へて教
を弘めなければならぬし。又在家の者は場合に依れば刀
を執つて戦ふくらゐな覺悟をして、さうしてこの正しい
教を護つて行かなければならぬぞといふことを教へられ
たのであります。如何にもこれはいつの時代にも適切な
教であります。人間が皆聖人君子になつてしまへばそ
れは宜しうございませう。けれども世の中にはいろいろ
な人間がありますから、宥して置くといふことは結局榮
耀することになるかも知れぬ。それが恐ろしい、それを
宥して置くことと善い事と思ふ。善い事と思ふとだんだんそ
れが増長する、だから不正を宥すといふことは不正を榮

勵することになる。それは非常にいけない。この事は今
御書を讀んで行きますと、少し後の方にもさういふ意味
があります。兎に角悪い者だつたら、悪いとチヤンと
言つて改めさせなければならぬ。放つて置くと思はな
いと思ふ。

斯ういふ事は幾らもありません。亞米利加のエマーソン
といふ人は随分靜かな人ですが、このエマーソン
が面白い事を言つて居ります。人がお前の頭を殿つた時
に、何故殿つたと言つて咎めない、相手はこの頭は殿
つて宜い頭だと思つて、又後で幾らも殿ると言つた。實
際さうです。殿られたら咎めなければならぬ「何で殿
のだ……」「ハア、悪かつたかナ」と思ふ。殿られて黙つ
て居ると、ハアこれは宜いなと思つて幾らも殿る。人
間といふものはさういふものであります。不正を宥して
置くことと不正ではないと思つて増長して来る。それだから
不正を宥すといふことは慈悲ではない。本當に慈悲があ
るならば、その不正を直してやつてそれに自覺を興へる
といふことが本當の慈悲であります。佛教に於てもその
事を教へられて居る、人の不正なを見てそれをその儘
に捨て置くといふことは、要するに慈悲の心持の足ら
ないことだからそれはいけない。佛の本當の弟子の心掛
けではないといふことが言はれて居るのであります。自

分の私の心持を以て彼奴が憎いといふやうなことで人と
戦ふのはこれはいけないのでありますけれども、相手の
人を覺醒させる爲ならば、争ふといふこと、戦ふといふ
ことは又巴むを得ない。これは大乘の佛教に於て許され
て居ることでもあります。

それは場合に依る。だから章安といふ天台大師のお弟
子が涅槃經の事をいろいろ説明して書いて居りますが、
その章安の言つた言葉の中に「取捨宜しきを得て一向に
すべからず」優しく人を教へるのが宜いこともあるし、
又激しくして人を攻撃するのが宜いこともある。どれを
今やつたら宜いか、どれをやめたら宜いかといふことは
宜しきを得る、その時々によつて違ふのだ。「一向にすべ
からず」ただ一概に斯うしたら宜いといふ譯に行かない
といふことを言つてあるのであります。この「取捨宜し
きを得て一向にすべからず」といふ言葉は私は非常に味
はふべきことだと思ふ。今の普通の教育に於て倫理道德
の講義をしても、斯ういふ事は教へないで、ただ事柄だ
け列べて教へて居るのだからどうも應用が利かない。い
つかも此處で話したことでありすが、人に親切にする
といふことは宜いことだ、人に親切にするといふことは
あなたお先へと言つて自分が後から行くことだといふの
だが、電車が満員の時にはなかなか乗れない。あなたお

先へと言つて居た日にはいつまで経つても乗れはしな
い。さうすれば自分の大事な用は出来なくなる。サアど
うしよう、人を突退けて乗つても自分の用事をした方が
宜いか、それとも自分の用は間に合はなくてもあなたお
先へと言つて人に親切にする方が宜いか、これは兩立し
ない。大概の人はさういふ時は困るでせう。さういふこ
とで幾度も困ると、どうも倫理道德といふものは當てに
なりはしない、逆も今の世の中に當嵌らないから、モウ
いつそやめてしまへと大概斯うなる。私共永い間青年の
人を教へて居るけれども、青年の人が墮落するのは皆そ
こナンです。初めから悪くはないが、習つて居る一つの
道德と道德とが兩立しない。こつちをやるとこつちが出
来ない、こつちをやるとこつちが出来ない。面倒くさい
兩方よしてしまへ、斯うなる。これはとても困つたこと
であります。マア學校を卒業する若い人があるといふ
と、親類の人などは皆心得を説いて、お前も永い間親に
心配を掛けて卒業したのだから、卒業したら然るべき地
位を得て生活に困らないやうにして親を安心させてやれ
といふやうなことを言ふ、當人もその氣になつて居る。
すると今度は先輩の人などを訪ねると、どうも世の中は
正義の者がない、人の御機嫌を取つて出世するといふ者
が多いから、お前世の中に出たら正義を貫いて呉れ……

尤だと思ふ。これは世の中に出て見ると兩立しない、早く身を立つて出世をして親を安心させようとする、少しはお世辭を使つたり、嘘をつかなければならぬ。正直にして生一本で行くといふと、いつ迄経つても出世は出来ない。斯うなる。親を安心させるといふことも善いし、正直にするといふことも善いのだが、これは兩立しないぢやないか……そこで若い人は困る。どつちも善いことだが兩立しない、どうしようかと思つて居る内に面倒くさい、兩方やめてしまへと斯うなつて来る。それで目先流になる。青年が墮落するのは皆それでありませう。初めから悪者にならうと思つて學校へ入つて来る者はないが、昔の中は複雑でありますから、どうも善いことと善いことが兩立しない、仕様がなないぢやないか……斯ういふことに始終出會ふのであります。

それだから頭腦をつくらなければいけない。ただ忠義をする、孝行をする、親切にするといふことだけ考へて居てはいけません。自分がしつかりした信仰を有つて行きますと迷ひがなくなり、迷ひがなくなると自分の分別がハッキリ出来るから、この場合には斯うしたら宜い、この場合には斯うしたら宜いといふ、その場合々々に應じて正しい途が解つて来る。それが『宜しきを得て』といふことで、これをしなければならぬ。同時に二つの事は

出来はしませぬ。あまり用のない時だつたら電車に乗る時にあなたお先へと言つて自分が遅れる方が善いでせう。ところが自分の親類で誰か死にさうだといふので駆けつけるといふ時ならば、一分を争ふのだから、その時は少しは人を突退けるぐらゐにして乗つても、その方が善い。突退けて宜いこともあれば譲つて宜いこともある。場合に依る。その場合を知らないでいつでも譲つて宜いとも言へないし、いつでも突退けて宜いとも言へない。前後の事情をスツカリ照して見て、一番善い途を執つたら宜い。これは能く考へなければならぬことであります。

おかしい話がありますが、日露戦争の時に、私の知つて居る家の書生が、その家の主人の息子が出征するので、戦捷祈願のお守を買つて来いと主人に言ひ付かつた。それから神社に行つて頼んでお守を買つて、それを洋服のポケットに入れて歸り掛けた、それから人込みに揉れ揉れして居る間に電車に乗らうと思つたところが電車の切符を落した。そこでその電車の切符を拾はうと思つたところが人込みだからなかなか拾へない。彼れ此れ苦心して漸く電車の切符を拾つて電車へ乗らうと思つて、ふとポケットへ手をやつて見ると、いつの間にかお守を落してしまつて居たので、又モウ一遍買ひに行つた

といふ話があります。私その話を聞いて一體人間は軽い軽いの區別を知らないからいけないのだと熟々思つた。平生なら電車の切符を無駄にするのは惜しいから、どんな事しても落した切符を探すのも宜いでせう。けれどもその時には大事なお守を買ひに行つて居るのだから、そのお守を落すくらゐなら電車の切符ぐらゐ無駄にした方が寧ろ小さい事ナンであります。そこを考へなければならぬ。私その話を聞いた時に、これは小さい事ではない。人間皆これナンだ、重いと軽いとあるのだから、軽い方に力を入れてその爲に大事な事を捨てるといふ場合が屢々ある、電車の切符の五錢や十錢の問題ではない。人生の大事な問題に於て始終斯ういふことがある、だから頭を本當に養はなければならぬ。何が今の場合に一番大事な事であるかといふことをしつかり辨へて、軽重の別を立てなければならぬといふことを熟々思つた譯であります。

『宜しきを得る』といふのはそれを言ふ。今の場合に何が人間として一番善い途であるか、これはその場合に依つて違ふ。或る時にはあなたお先へと言つて優しくするのが一番善いこともあるし、或る時には氣の毒でも聲を馳まして、これを叱つてさうして目を覚まさせるやうにした方が善いこともあるのであつて、『一向にすべから

ず』それを一概にいつでも斯うやつたら宜いと定める譯には行かない。斯ういふのであります。そこはマア平生信仰を馳んで居りますと、自然に心の迷ひがなくなりますから、心の迷ひがなくなれば曇りのない鏡のやうな状態だから、ものがハッキリ映り、その場合々々に適當なことが解つて来る。その大事な事を捨てて置いて、ただ親切にするとか、孝行をするとか忠義を盡すとかいふことばかりごちやごちやに頭腦の中に詰込んで、その通りすることは出来て来ない。これは非常に善い言葉であります。

それから天台大師が言ふのに『時に速ふ而已』時に應ずるのだ、優しくして宜いこともあるし、激しくして人の過ちを指摘して、これを直させるやうに努める方が宜いこともある。これは場合に依つて違ふ。これは昔の人も言つて居る、信仰をするに就いてはその場合を能く考へて、その場合々々に適當な信仰の仕方をしてなければならぬ。譬へば秋の終りに田畠を耕し、種子を下したのでは米も何も得ることは出来ないぢやないか、春の初めに田を耕して種子を植れば、秋になつて稔りが出来るけれども、秋になつてから田圃を掘返して種子を下してもそれは役に立たぬ、それと同じことで、時代に合はないことを習つて、時代に合はないことを信じて、それは

役に立たぬ。ちやうど寒くなつた時に種子を播くやうなもので、骨折損である。能く時代と場合とを考へなければならぬのである。

ところが法華經といふものは、これは末法の世の人の信すべきものである、世の中がだんだんと險惡になつて行つて、尋常一様の教では人の心の覆りにならないといふくらゐに差迫つた時に、佛が魂を打込んで説かれたこの法華經といふものが初めて本當の光を發するのである。この事は決して後世の者が勝手にきめたのでなく、お釋迦様御自身がこの事を言つて居らつしやるのだから間違ひない。即ち時代を言へば末法の世、末法の世に於て教はやはり佛の教といふものがちやうどこれに適するのである。それを忘れて、そんなに世の中が險惡にならない比較的軋氣な時代に人を教ふことが出来るといふ教をその儘に持つて来て、この末法の世の人の心の險惡になつた時代にこれを弘めようといふことは、これは間違ひである。その間違ひを間違ひと氣が附かないで教を弘めるといふ事は、自分で世の中を惑はさうといふ惡意はなくても、結局世の中を惑はす大きな罪を犯すことになる。自分が悪い事をしようと思はないでも、考が足らないといふと、人に迷惑を掛けたり、害を及ぼしたりするやうになるといふことは、幾らも世の中にさういふ

た小刀が人を殺すことにもなつたといふことはこれは不思議なことでもあります。それだから小さい過ちがどんな大きな結果を惹起すかも知れない。人を殺さうと思はないのに人を殺すやうな結果になるかも知れない。だから一言一行といふものは慎しまなければならぬ。世の中を害するつもりでなくても、それが世の中を害することになるかも知れない。人を惑はすつもりはなくても人を惑はすことになるかも知れないのであつて、本當に少しのことでも間違ひのないやうに始終戒しめるといふことは非常に必要であらうと思はれるのであります。法然といふ人も決して世の中を惑はすといふやうな惡人ではない、それは世の中を救ふつもりで教を説いたに違ひない。親鸞もさうだし、その他禪宗を弘めた人でも、誰も惡人はない。けれどもそれが世の中の時機に應じない教を説くといふと、自分で罪を作らうとしないでも、自然に世の中の人の考を正しい道から離へすらせるやうな結果を生ずる。斯ういふことを言はれるのであります。日蓮上人は法然やその他の人を憎んで言はれるのではない。惜しいことだ、斯ういふ心持で、これだけ佛の教に熱心であるのだから、佛の御本意に違つて、時代に即して教を説いたならば、定めし世の中に利益を興へるであらうけれども、そこが解らない、それでどうも時代に合

例がある。だから惡意を有たないでも罪を犯すといふ場合は屢々ある。これは餘程氣を附けなければならぬことでもあります。私自分で不思議な事を見たことがある。餘程前のことでありますが、新橋の所から虎の門まで歩いて行かうと思つて鳥森の所を通つた。さうしたら道の上の高い所に電線があります。その電線のどういふ所を踏すのだから、工夫の人が二三人高い所に上つて居た。さうしてその中に小刀のやうな鉄のやうなものを持つて居る人が居た。ところがその工夫の人がヒョツと誤つてその小刀を落した、小刀はえらい勢ひでズツと落ちて來た。さうしてその下を通つて居た人の頭のまん中に當つた。これはモウ即死です、モウなにしろ何十丈といふ上から、えらい勢ひで小刀が落ちて來たのだからその儘直ぐ其處に仆れて死んでしまつた。私はこれを目の前に見て恐ろしいものだと思つた。一體幾ら武藝の名人が狙つても、なかなか頭のまん中には當るものではないけれども、時の拍手といふものは恐ろしい。ちやうど頭のまん中に當つてバツツと仆れてその儘死んでしまつた。私はそれを見て熱々思つた、人間罪をつくるといふことはいろいろあるのだ、ナニモ相手を殺してやらうと思つて投げた譯ではない。殺してやらうと思つて投けてもなかなか當るものではない。偶々不注意で手をすべらして落ち

はない教を説いたといふことは如何にも惜しいことだ。斯ういふことを言はれるのであります。(次續)

本多上人十二回忌 謝恩清集案内

三月十四日(日曜)晚六時

於統一會館

法要及講演會

同 十六日(火曜)午後二時

品川妙國寺

勤修及展墓

財團 統一團
法人 統一團

本佛實在の宗教哲學(廿一)

河合 陟 明

十五、個佛の開覺における時間究盡の二面性

實在の問題は永遠の問題である……といふは然しながらいかなる意味であるか。凡てのものの根柢となりかつ歸趨となるところの眞の實在とはいかなるものであるか、といふ一事をめぐつて、人類古今の全思想史は開展し來つたのである。實在の問題、それはウインデルバンドが哲學史の劈頭に掲ぐるが如く、まことに「存在の太古の謎」である。洋の東西を貫いて凡ての眞摯かつ嚴密なる *Wahheitsforseher* 眞理探求者の故は、このあだかも數學における極限點の如く、無限にこれに近迫せんとするもしかも容易に達し得ざる一點を繞つて、しかも又つひにこれに到達しこれを獲得すべく幾多の苦悶と努力を披け來つたのである。したがつて又その意味は同時に第二に、實在の問題とは無限なる時の世界を飛び超えて永遠なる存在の世界に躍入することを意味せなければならぬ。換言すれば、眞の實在は永遠そのものであらねばならぬのである。しかも此に至つて果然、萬物の根柢となりかつ歸趨となるところのものは、一にしてしかも亦二なることを知るに至る、予は前者をカント開關的に *Quid juris* 根據問題といひ、後者を *Quid facti* 事實問題といふ、しかももちろん後者の意味における事實とは、シュライエルマツヘルが神は *Höherer Reichtum* 高次の實在なりといへる如き意味において、高次のなるしかも偉大なる現實の存在であるのである、吾々よりしては、ただその現實といふ面においてはひとしく現實であるが、しかもそれこそ眞の絕對現實として超越的現實であり、超現實的現實であるのである、いはゆる價值と實在との統一としての實在であるのである。これを佛敎固有の概念においていへば、一を眞如といひ、一を本佛といふ。前者は根本實在にしてしかも先驗原理たり、かつ一切の覺の原型な

るがゆゑに、予はこれを覺自體といひ理全といふ。また後者はすなはち人格完成の經驗的絕對たり、しかも無始の完全實在なるがゆゑに、予はこれを佛自體といひ事全といふ。予が是くの如く眞如と本佛をさして理全と事全といふは、かの天台が藏・通・別・圓の四教すなはち生滅・無生・無量・無作といふ四段の教理あるひはこれを觀門でいへば折色・體空・次第・圓頓といふ四類を、一種のアンチノミー(二律相反)的かつ辨證法的に配列して、しかも凡てこれを善の體系とし、もつて界内と界外との事善と理善といふ交互的階段となせるところの思想とは、その事理の意味および價値的順序が異なるものであるが、しかもまた彼れみづからの固有の概念と一系の脈絡をたどれる發展でもあるのであつて、かつ彼れの哲學的思想をその理論的かつ實踐的要請にしたがつて行きつく處にまで行き着かしめたる、開關的統一説であるのである。而して事全本佛とは、かの理全眞如としての先驗的覺自體が、時空範疇としての經驗界に無始常恒に全現せる人格實在なるがゆゑに、これを佛自體といひ、かつ恩師の説に違つて予もまた完全實在と名くるのである。それはもちろん無始なるがゆゑにこれもまた根本的の實在たることはいふまでもない、かるがゆゑにこそ本佛と稱するのである。しかしそれは眞如の根本的なるとは意味および次元を異にする。ゆゑに予は二者を區別して、それらが齊しく共に本有として絕對ではあるが、しかも先驗概念におけるものを無作本有と呼び、經驗概念におけるものを無始本有と呼ぶのである。而して眞の最後の絕對は、前者をも掩いて後者に求めねばならぬ、何となれば本體論的原理に對する認識論上の絕對、しかもそのノエマ(境)的絕對にあらずしてノエシス(智)的絕對、すなはち眞に自覺の絕對なるものこそ、一切を自己の中に包容して全智なる最大の實在であり、かつその總てを受用して自在無限なる全能の實在者であるからである。本佛こそ本有の意味を最高度に充實したるもの、とくに予の意味するが如き意味において最大の本來有つものであり、即ち最大の本來富めるものであり、又もとよりその壽は本來すなはち無始無終なるものであるのである。古來、不讀_二華嚴_一、不知_二佛富_一、不讀_二法華_一、不知_二佛壽_一といはれてゐるが、眞に本佛こそ如來の富と壽を全うせるものであることを知らねばならぬ。

しかし是くの如きことが説かるるがためには、かの古來何人によりても容易に達しがたかりし眞理と實在の極限點が達せられ、したがつてそこに達するまでの無限の時が飛び超えられねばならぬ。すなはちここには生命の絕對飛躍がなしとげられねばならぬ、而してそこに始めて萬物の目的すなはちこれを根本的にいつて宇宙生命の目的すなはち

宇宙そのものの目的が完全になしとけらるるのである。しかしそもそも是くの如きことは果して可能なりや、東西古今の思想は殆んどこれに對して明確なる解答を與へたるものはない。これ眞實在の問題が存在の太古の謎たり永遠の問題たる所以であるのである。しかもかくの如き太古の謎を解いて永遠の存在を立證せんがためには、嚴密なる理性の推論と共に、偉大なる現實の實證が示され來たらねばならぬ。しかし果して是くの如きものがあるであらうか。Man is endowed with reason and speech. 人間は理性と言語とを天賦す、その人間の高貴なる理性と嚴然たる事實の上に、萬人普遍の承認を贏ち得るが如き妥當なる立證が果してあり得るであらうか。然り、ただ一つ、人類史上唯だ一つ、全人類の總ての富・總ての文化財を補つてなほ餘りあるところのものが儼存する、それは實に偉大なる釋尊の出現成道である、如來釋尊の降魔成道の靈光であるのである。

大覺佛果といふ生命の絕對目的を完遂すべき「時の無限の經歷」すなはち時をしてここに到達せしめたりし宇宙生命の必然的力と法則を、因果といふ。而して因果の完了において現るるものはまづ一個完全人格としての佛陀である、これを個佛といふ。けだし無作本有なる宇宙根柢即己心根柢としての眞如は、超時空的・超個性的實在として原理的・原質的なるものであり、それが自己の宿命的負擔をむしる宿命的自己喪失たる不有すなはち無明を破つて今有の自己を決斷し自有の自覺を限定する自己創造・自己把握は、個として現るるものであつて、したがつて時の世界すなはち歴史は個性價値の創造の場所として無限なる *offener System* 開展體系をなしゆくものであり、その時の完了すなはち歴史の超越とは價値の全現すなはち汎宇宙的なる本體の顯現であつてしかも個性人格の完成であるからである。個佛はここに成立する。しかも宇宙の王者たり法界の法王たる無始の本佛に達せんがためには、必ずまづこの個佛を経過せねばならぬ、個佛を通じて始めて本佛に達するのである、本佛の富と壽を探らんがためには、まづ個佛の吟味よりして始めねばならぬ。しかもまた個佛と本佛とは全く一體不二のものであつて、ここにはかの西洋哲學あるひは基督教神學等においての難問たりし *Substantiellismus und Nominalismus* 實體論と名目論との究極統一が、佛敎本來の中道思想の最高峰として實現せらるるを見るのである。予が本佛の中道的構造あるひは性格と稱するはこれに外ならない。それでは是くの如き眞の意味において個全一如・始本不二なる一大統一の佛陀における時と永遠の問題は、いかなる處よりその歩式を始めかつ進めらるるのであらうか。今、予は直ちに佛果の規定に入らんとするのであるが、

なほその極果に來たるべき必然の経路について一瞥を拂はねばならぬ。

此においてかくの如き最後の絕對に到達すべき論理的過程と構造を尋ぬるならば、今一言した如く、かの無作本有の根本實在たる眞如法身は、それが無作といはるる如く、それはたゞ本體的・先驗的なる非人格的・原始統一であつて、未だ現實的には自己自身に充足せず、自己自身に飽和せず、それゆゑこの本有の實在は、本來「覺自體」たる所のその理本覺としての自覺的性質を事として實際に具體的に充足することを要求し、而してそれはまた實在の本性に適ふものとして、即ち實在の目的たる所のものとして、まさしく善の性質を充足することであるのであり、その實現充足のために無限なる歴史的創造の時間を開展し、生々世々三世にわたつて個性人格として道徳を實踐し、菩薩行を行するのであつて、ここに本有體系における先驗的なる本行または本業の原理が、現實經驗として現れきたるのであり、ここに即ち實在は觀念の世界より意志の世界に躍出するに至るのである。これを予は佛性の向覺・行善と稱する。予が斯く名くる所以は何に由來するやといはば、それは固より予の眞如體驗あるひは人生體驗に基くものであるが、しかも實に恩師が宇宙を統一的に洞察せられて「宇宙を大觀すれば、諸法何物か涅槃に向つて進まざるといふべきである。固より此間には墮落もあるが、しかし宇宙を建觀するならば、萬物はひとしく生成發展して無限の向上を邁らんとしつづつあるものである」と説かれたるところに由來するのであつて、さらに一層その根柢を尋ぬるならば、それはかの月上女經にいはゆる

一切諸法、豈不向涅槃行也、我於今者、亦向彼行、若向涅槃、即不滅度、何以故、其涅槃行、不生滅、故、行涅槃者、即是涅槃、故涅槃者、實無可滅、

と窺察たる淑女が智慧第一の舍利弗に對し宇宙の大眞理を道破したところの向涅槃の一語に淵源するのであり、さらに妙法華經における懺容整然たる本門の序において、地誦の菩薩が陸續として出現せるに對し、總處の彌勒すらなほ乃不識一人、よつてその因縁を聞ききたまつらんと欲して、有名なる父少子老の譬をあげたる後、

而此大衆、諸菩薩等、已於無量千萬億劫、爲佛道故、勤行精進、善入三昧、無量百千萬億三昧、得大神通、久修梵行、善能次第、集諸善法、巧於問答、人中之寶、一切世間、甚爲希有、今日世尊、方云得佛道時、初令發心、教化示導、令向阿耨多羅三藐三菩提、

といへるその向善提の一句をとり来て予はすなはち向覺と名くるのである。また行善といふは、あだかも自覺が實在の目的なる如く善は人生の目的であり、而して人生は即ち實在であり自覺は即ち善であり、and the reverse the case 逆もまた真なり、實在の本質は畢竟するに向覺意志にあり、その意志の實現にあり、換言すれば、西田哲學の根本思想として味ひ深き言葉たる、いはゆる「迷ひつつ善を求むるが人間の運命であり」、しかもつひに善を行つて覺りに達するといふが生命の順序および目的でなければならぬ。その道程たる善がまた自覺によつて深められるのであり、その目的たる覺りがまた最大の善であるのである。自覺と實踐と、寂智と善行とは、たがひに因となり果となつて發展する。しかもその究極目的たる覺りといふはかの單なる人生における自覺の發展といふ如きものではなくして、實に佛陀の大覺であり、如來の極果極證を極め盡さずんば止まざるものでなければならぬ。ここに先にもいつた如くベルグソンのいはゆる *élan vital* 生命の飛躍が法華經の開顯を業つてその最高度における實在の境界にもたらされ、彼の自然的なる生物學的哲學がさらに一大發展して如來大覺の形而上學に迫りゆかねばならぬ所以が存するのである。このゆゑに天台は法華玄義において四教の教觀二門を通じて事理二面の善の體系となし、さらに摩訶止觀においてその止と觀とに各々三義を分ち、これをそれぞれ定門と觀門と理門とに攝屬せしめ、かつそれを止善と行善と法性の理善といふ三種の善の自覺的還元システムとしてゐるのであつて、予はその精神を一括してこれを佛性の行善と名くるのである。かつ予の行善と名くるは天台の止善も行善も理善も總てを包括した概念であるが、しかし天台においてもこの語は觀門の般若に屬するのであるから、その行善の内容は觀すなはち自覺と相應するものであつて、ゆゑに佛性向覺といふ概念ともまたよく相應するを見るのである。否一層根本的にいへば、すべて行善とは自覺であり、自覺とは行善であり、而してそれは實在の限定であり、いはゆる有と知と行とはつねに相應並行し相即一如するものであるのである。ただその行善の目的すなはち生命の目的はつねに善を内容とすることではなければならぬ、しかもかく善を爲すといふことが眞の自覺であり、而して眞の自覺とは實在をその内面より創造發展せしめるものであつて、予のいはゆる無作の本有にして未だ非有なるものが眞に自己自身を有ち、自己自身を知り、自己自身に富み、自己自身と成る、かつ自己自身を用ふる所以であるのである。これを本有の自覺といひ、眞如の體驗といひ、法性の融通といひ、佛性の向覺・行善といふ。南無妙法蓮華經 昭和十八年 神武創業の紀元節

記事

本部 團報

開館記念 本團總裁故本多鏡下の遺命を奉じて昭和八年二月十一日、當淨舎の開館されてより早くも滿十周年を迎へたので、紀元佳節の奉祝と共に本部に於ては午後二時より大會を開催した。五十年前、本多上人の護法愛國の結實たる此の統一團、内妙宗各派の統一團、外淨朝邪教の折伏立行に勇精すべき統一團、その歴史を顧み、且つ本多上人が如何に統一團を重要視されてゐたかを追憶して無量の感激を新にするものである。磯部常任理事は修法後、講演會開會挨拶として、現況と各方面の關係や、本團の三大要義等に就て略説し、續いて小林一郎先生は「慈悲心と勇猛心」の題下に約一時間無礙辯を以て此の決戦期に於ける吾人の心構へを懇説された。少憩の暇もなく琵琶講演の宗家水也田香洲先生は、先頃大陸の勇士慰問に愛器を過勞せしめ、未だ修理完成に至らずとて薩摩悲話を素語りされたが、却て人々に森嚴な感動を與へて歡ばしかつた。日足の短かい頃とて和賀義見師の閉會の辭に意義深い暮を閉ぢた、日生上人の御令嬢達、

御親戚を始め、岩野少将や其他幾多の知法思國の若い士女の清集は一入有難い想がした。

その他 二月四日の節分は、立正奉修行會滿了の歡びの朝で修法講話後、三十日皆勤者十七名及び精勤者十三名に褒状と記念品を、又参加者二十四名には参加證を授與し、七日以下の参加者二十餘名には隨喜の功德を説いて後、池田新一氏、納富康之氏等の感想談あつたが、時間の餘裕もないこととて一段落をつけて直ちに追儂式に移り、池田新一氏の鮮かな豆壽に、一同は福は内でニコニコを以て閉會。

八日大詔奉戴記念日は朝六時より早起勵行で御寶前に舉行し、勤修後、金城唯温氏司會者となつて國民儀禮を行ひ、磯部理事の講演あつて八時頃散會。

十五日の掃障を期して、特に莊嚴された御寶前に恭しく大聖釋尊の非滅現滅會と、宗祖の御生誕會を營んだ。勝鬘經講座は毎週土曜日午後二時より、例の通り小林先生のお骨折りを戴いてゐる。

はちす婦人會は第一と第三の土曜日午後三時より熱烈に營まれて、御婦人達の強き信仰に頼うたれる。

福島 教信

高商例會 二月六日學校の授業後、實務科教室に於て、

橋本講師により、日蓮聖人傳、前回の続きとして御開宗から鎌倉街頭折伏、幾多の法難迫害を善提化され、身延入道山より池上御滅度に迄一氣呵成懸河の熱辯で講述され、血に燃ゆる若い學徒を奮起せしめられた。

町の會 十四日晚七時大町中村様方にて例會を催し、福岡先生の入信動機から現在の心境等強き盛んな信念を吐露され、橋本講師は日蓮教學の最高標準と稱せられる開目鈔の梗概を少々講讀あり、極めて意義深い清集を見た。

開費誌料維持費及寄附金額收(自二月二十一日)

一金拾五圓也	基隆	高橋日應殿
一金貳拾貳圓五拾錢也	東京	笠間信語殿
一金壹圓貳拾錢也	福岡縣	大久保久市殿
一金貳圓五拾錢也	高岡	林長吉殿
一金貳圓五拾錢也	新京	長澤信一殿
一金五圓也	川崎	廣瀬乾誓殿
一金貳圓五拾錢也	東京	石川顯隆殿
一金貳圓也	山形縣	村川源次郎殿
一金貳圓貳拾錢也	東京	宮尾弘子殿
一金貳拾貳圓貳拾錢也	北支	植村五郎殿
一金貳圓四拾錢也	上海	植村美加夫殿

一金五圓也	東京	會田秀吉殿
一金五圓也	鳥取	高田日暢殿
一金貳圓貳拾錢也	東京	片桐徳次郎殿
一金五圓也	同	中村文吉殿
一金貳圓貳拾錢也	千葉縣	齋藤昭行殿
一金五圓也	岩國	中村明法殿
一金貳圓貳拾錢也	飯坂	佐藤權右衛門殿
一金貳圓五拾錢也	三重縣	伊東寛殿
一金六圓也	東京	原田精造殿
一金五圓也	同	池田悦太郎殿
一金五圓也	千葉縣	武田顯龍殿
一金貳圓貳拾錢也	東京	山田英二殿
一金貳圓貳拾錢也	基隆	原光太郎殿
一金貳圓五拾錢也	津山	渡邊孝殿
一金貳圓五拾錢也	山形縣	村川源次郎殿
一金五圓也	東京	伊藤夏子殿
一金五圓也	長崎縣	前田瑞穂殿
一金貳圓五拾錢也	静岡縣	川手海祥殿
一金貳圓五拾錢也	愛知縣	市川通源殿

右欄有人張仕候也 (以是領收票代用)

財團法人統一團會計

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版特價	金壹圓九拾錢
法華經要義	賜天覽	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓	同	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要	同	金貳圓九拾錢
法華經要品	同	金五拾錢
本尊意識に就て	同	金貳拾錢
法華經の心髓	同	金壹圓五拾錢
黎明の原理	同	金五圓

佛敎の心髓	同	送料實費
本多日生上人	同	送料實費
勳行作法	同	送料實費
佛敎の心髓	同	送料實費

河合勝明著
皇道と日蓮主義

定價	金壹圓
送料實費	四

東京市小石川區普羽町六ノ十七
財團法人統一出版部
振替東京九四二〇番

統一團 定價一統
一冊 金貳拾錢 送料壹錢
半ヶ年 金壹圓貳拾錢 送料共
一ヶ年 金貳圓貳拾錢

○御申込ハ總テ前金ノ事
○前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
○再購居ノ場合ハ必ず新圖共ニ御通
知ノ事

昭和十八年二月二十五日印刷
昭和十八年三月一日發行
(第五百七十六號)

東京市小石川區普羽町六ノ十七
編輯兼 磯部滿事
發行人 磯部英二
印刷所 野島好文堂印刷所
東京二〇五二

發行所 財團統一團
東京市小石川區普羽町六ノ十七
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番
配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二丁目九番地

統

一

明治三十年十二月二十三日
第三種郵便物認可
昭和十八年三月一日發行
（每月一回一日發行）

第五百七十六號

第四十八年 三月號